

# 元雜劇に見る明代の〈没〉と〈無〉について

渡 部 洋

## はじめに

〈無〉は中世の口語において否定詞として多用されていたが、宋元の時代になって〈没〉にその位置を徐々に奪われていき、明代に入ってからには〈無〉から〈没〉への交替が更に進んだ<sup>①</sup>。そうした過程の中で〈没〉は〈没有〉、〈没地〉等の言葉を生み更には未完了を表す否定詞になる現象をも出現させるに至ったが、その一方において〈無〉は口語の色彩を徐々に失っていた。香坂氏も元明代には〈没〉が口頭語として優勢になったものと推定されているが、明前期と明後期での〈没〉と〈無〉の使用状況が実際どのようなものであったのかについてはあまり明らかにされてはいないようである。これを解明する1つの方法として考えられるのは〈没〉と〈無〉について元曲選以前に成立していた于小穀本、内府本系諸本の脈望館鈔本、古名家本、息機子本と明後期に成立した元曲選本等を詳しく研究調査することである。なぜならこれらのテキストが明代の異なる時期の言語が反映したものと考えられるからである。于小穀本は内府本系諸本とは異同が少なくほぼ同等のテキストと考えられるが、内府本系諸本は明代前期宮中での上演用に作られたテキストに基づくもので元刊本とは異なり明代に相当手が加えられている<sup>②</sup>。このことから内府本系諸本に反映されている言語はおおよそ明前期のものと推測される。これに対して元曲選本はこのような内府本系のテキストに臧晋叔が後に改作とまで言われるほどに手を加えてできたものであるから臧晋叔の手が加えられた部分は彼の生きていた明代後期の言語が反映しているものと考えられる。

小論は上記視点からこうした異なる時期の言語を反映したテキストである内府本系諸本と元曲選本の中に見える〈没〉と〈無〉を比較検討し、そこか

ら明代前期と後期における〈無〉と〈没〉の使用状況の変化を捉えようとするものである。

## I 〈没〉の個数の相違

明代後期になって〈没〉の使用頻度が増えてくることはすでに報告されている<sup>⑤</sup>。元雑劇においてもその傾向はよく表れている。下記の表1は36種類の作品についてそれぞれのテキスト中の〈没〉の個数を比較したものである。表の数字は各テキストで見られた〈没〉の個数を表し、+、-、=等の記号は下に示す通り〈没〉の個数が元曲選本になってどう変化したかを表している。尚、脈望館鈔本は鈔本と略称した。

-が9種、=が5種あったものの22種が+を示していることから〈没〉が

表1

	鈔本			元曲選		
	鈔本	古名家本	息機子本	鈔本	古名家本	息機子本
漢宮秋		3		2-		0=
玉鏡臺		6		8+		2=
謝天香		2		2=		4+
張大師	3			5+		3=
救風塵		4		4=		7+
燕青博魚	4			14+	1	9+
牆頭馬上		0		2+	1	2+
梧桐雨		8		8=	1	6+
玉壺春			4	5+	4	6+
風光好		4		3-		4=
薦福碑		3		3=	3	15+
岳陽樓		3		2-		5+
蝴蝶夢		8		12+	0	15+
勘頭巾		8		11+	3	8+
陳搏高卧		6	6	6=	4	13+
黃梁夢		11		13+	5	9+
魯齋郎		5		8+	3	1-
青衫淚		6		5-		33+

+：個数が元曲選で増加したことを示す。

-：個数が元曲選で減少したことを示す。

=：個数の増減のないことを示す。

元曲選で多用される傾向にあったことがわかる。また、9種の作品は一であるが、1つもしくは2つ少ないだけで大幅に減少しているわけではなく、恐らく臧晋叔が改作したおりにたまたま削られたものと思われる。もしそうであるならば=の5種とはほぼ同じものと考えたほうがよいかも知れない。ただ+の作品の中ではかなりの偏りがある。例えば「燕青博魚」の場合鈔本4個に対し元曲選本では14個と10個も増えているが、「玉壺春」のように作品によっては1個か2個増えているだけなのである。このことから臧晋叔が作品によって意図的に〈没〉の使用を多くしたり少なくしたりしていたことが推測できる。なぜ意図的にそのようにする必要があったのかは個数の相違だけでは十分に窺い知ることはできないので先に各作品のテキスト中の〈没〉の用例について考察し、その後この点について論じようと思う。

## Ⅱ 内府本系諸本と元曲選本の用例の相違

各テキストに見る〈没〉の用例については各作品でそれぞれ状況が異なるので作品ごとに考察していなければならないが、これについては内府本系諸本と元曲選本での用例の出現状況の違いを捉えそれを手がかりに論じたいと思うので、各テキストにおいて一致している〈没〉の用例については省略しその個数だけを挙げることにする。尚、( ) は例の示す通り用例の所在を表すものである。

例

(古4 十唱)：古名家本 全元雜劇初編4巻 十葉唱

(鈔6 2863唱)：鈔本 全元雜劇初編6巻 2863頁唱

(息7 八唱)：息機子本 全元雜劇初編7巻 八葉唱

(元1 86唱)：元曲選一冊 86頁 唱

「漢宮秋」：古名家本の3例の内2例は元曲選本に見られるが、1例は削られている。

没个人敢咳嗽(古4 十唱)

「玉鏡臺」：古名家本に6例元曲選本に8例見られるが古名家本の例はすべて

元曲選本にも見られる。元曲選本では2例が新たに加えられている。

元來都恃着命強，便孔孟呵，也沒做主張（元1 85唱）

來日不空亡，沒相妨（元1 86唱）

「謝天香」：数の上では古名家本も元曲選本もおなじであるが、1例「没」の後に続く言葉が違っていた。

從來撲簌簌沒氣性（古1 十七唱）

從來個撲簌簌沒氣力（元1 152唱）

「張天師」：鈔本の3例は元曲選本のものと同じであるが、元曲選本では新たに2例加えられている。

又沒甚幽期密約（元1 176唱）

我怕沒九轉丹相送（元1 178唱）

「救風塵」：数の上では古名家本も元曲選本も4例であるが2例が一致するのに対し2例は異なるものとなっている。即ち元曲選本では古名家本の2例が削られ新たに2例が加えられているのである。

我一世沒男兒（古1 三唱）

他便初開時有些志誠，臨老也沒來由。（古1 八唱）

他每初時間有些實意，臨老也沒回顧。（元1 197唱）

你好沒來由，遭他毒手，無情的棍棒抽，赤津津鮮血流。

（元1 199唱）

「燕青博魚」：鈔本の4例の内2例においてその〈没〉の後に続く言葉が元曲選本のものとは多少違っているが同じ意味であるから、4例とも元曲選本のものとはほぼ一致することができる。ただ元曲選本には鈔本の4例以外に10例見られ、この10例の内2例は鈔本の中で〈無〉が使われているから8例が元曲選本で新たに加えられたもの

ということになる。

酒便儘有，可沒些按酒（鈔3 十四）

啗兩箇長遠做夫妻，再也沒人管着俺了。（鈔3 二十八）

酒便有了，可沒些穀饌。（元1 235）

衙內，只等結果了他，咱就沒人管的着了。（元1 242）

俺這店裏下着箇雙無目的大漢，房舍飯錢都無。（鈔3 七）。

俺這店里下着箇瞎大漢，缺下房舍飯錢，一些沒有。（元1 242）

兄弟，我便殺他，無刃器。（鈔3 二十七）

兄弟，我便要殺他，也沒的刀那。（元1 242）

早沒了我鏡也似朗朗的雙明目。（元1 230唱）

沒人在家，你進來。（元1 231）

兀那沒眼的大漢，店門首有你個鄉親喚你哩（元1 231）

瘦的來我身子兒沒個麻稽大。（元1 232唱）

我又沒甚的米麥絲麻，哥也你則可憐見我這窮漢瞎。（元1 233唱）

剛留的我這沒影孤身，借人資本爲營運。（元1 235唱）

你道是沒奸夫抵死來瞞定。（元1 241唱）

有他時春自生，沒他時坐不寧。（元1 242唱）

「牆頭馬上」：古名家本に用例は見られないが、元曲選本には2例見られる。

元曲選本の2例の内1例は古名家本の中で〈無〉が使われているものであり、あと1例は元曲選本で新たに加えられたものである。

眼里無珠処，我須知近弃個賢愚。（古2 二十一）

雖然是眼中沒的珍珠処，也須知略弃個賢愚。（元1 346唱）

少俊呵，與你幹駕了會香車，把這個沒氣性的文君送了也。（元1 344唱）

「梧桐雨」：古名家本8例と元曲選本8例は一致している。

「玉壺春」：息機子本に4例元曲選本に4例見られる。3例は一致するが、そ

れぞれ1例が異なるものとなっており、元曲選本で息機子本の1例が削られ別に1例が加えられたことになる。

早則沒話說（息8 五）

沒道理，全不怕咆哮兩行公人立。（元2 487唱）

「風光好」：古名家本に4例あるが元曲選本にはその内の3例が見られ1例は削られている。

若還家沒夫人，更做道性格純。（古10 十九）

「薦福碑」：古名家本3例元曲選本3例共に一致している。

「岳陽樓」：古名家本に3例元曲選本に2例見られ2例は同じだが古名家本の1例が元曲選本では削られている。

則你這瘦身軀沒些大小長起來被路人舉。（古5 十九）

「胡蝶夢」：古名家本に8例元曲選本に12例見られるが古名家本の8例すべてが元曲選本にも見られる。元曲選本の4例中2例は古名家本の中で〈無〉が使われているものであり、別の2例は新たに加えられたものである。

嗜家無有錢鈔，打官司使些甚麼。（古1 四）

這事少不得吃官司，只是咱家沒有錢鈔，使些甚麼。（元2 634）

教我兩下里難顧瞻，百般里無是處。（古1 十唱）

教我兩下里難顧瞻，百般的沒是處。（元2 638唱）

有權有勢盡着使，見官見府沒廉耻。（元2 632）

可早停着死屍，你可便從來憂念沒家私。（元2 633唱）

「勘頭巾」：古名家本に8例元曲選本に11例見られ古名家本の8例はすべて元曲選のものとは一致する。残りの3例中2例は古名家本の中で〈無〉

を使って表現されているものであり、あとの1例は新たに加えられたものである。

哥也，我也是屈招了，並無有。(古8 八)

哥，我也是屈招了的，委實沒有。(元2 672)

無那半點兒心慈。(古8 十二唱)

全沒那半點兒心慈。(元2 674唱)

好教我左猜右付沒端兒。(元2 679唱)

「陳搏高臥」：古名家本6例元曲選本6例共に一致している。

「黃梁夢」：古名家本に11例元曲選本に13例見られ古名家本の例はすべて元曲選本にも見られる。元曲選本の他の2例の内1例は古名家本の中では〈無〉を使って表現されている。あとの1例は新たに加えられたものである。

爭奈身上無穿的，自家姓魏，我父親是魏尚書。(古5 八)

爭奈身上沒穿的，自家姓魏，我父親是魏尚書。(元2 781)

他懷里又沒點點，與孩兒每討婆婆。(元2 791唱)

「魯齋郎」：古名家本に5例元曲選本に8例見られ古名家本の例はすべて元曲選のものとは一致する。元曲選本のあとの3例は新たに加えられたものである。

花花太歲爲第一，浪子喪門再沒雙。(元2 842)

只是張珪沒福消受，請大人墳院里坐一坐。(元2 846)

雖然个留得親爺沒了母，只落得一番思一番悲。(元2 849唱)

「青衫淚」：古名家本に6例元曲選本に5例見られるが古名家本の1例は元曲選本では削られている。

這個四幅羅衾沒巴臂。(古4 十五唱)

「麗春堂」：古名家本元曲選本共に〈没〉は見られない。

「後庭花」：古名家本2例元曲選本2例共に一致する。

「酷寒亭」：古名家本に2例元曲選本に4例見られ古名家本の例はすべて元曲選本のもものと一致する。あとの2例は新たに加えられたものである。

新心了正室，撇下個幼女嬌男，可又沒甚的遠近親戚。（元3 1005唱）  
他和你又沒甚殺爺娘的離共隙，怎這般苦死的。（元3 1006唱）

「忍字記」：息機子本に2例元曲選本に2例見られるが1例は一致するものの息機子本元曲選本それぞれが異なる1例をもつ。元曲選本では息機子本の1例が削られ1例が加えられていることになる。

老子沒人情。（息6 二十一）  
我爲一貫錢，打殺一個人，平白的拿奸情也沒有。（元3 1072）

「紅梨花」：古名家本に4例元曲選本に7例見られ古名家本の例はすべて元曲選本のもものと一致する。あとの3例は新たに加えられたものである。

哥哥便留我在書房中安住，也沒什麼興味。（元3 1080）  
莫不是安排着消息踏着應，便這等怒忿忿沒人情。（元3 1085唱）  
怎知他別後些兒沒挂牽，竟不記的梨花面。（元3 1091唱）

「冤家債主」：鈔本に1例元曲選本に9例見られ鈔本の1例は元曲選本のもものと一致する。元曲選本のあとの8例中2例は鈔本の中では〈無〉を使って表現されている。他の6例は新たに加えられたものである。

大哥，無極所奈，還了者。（鈔6 2862）  
大哥，這也沒奈何，你還了者。（元3 1134）  
若不分開了呵，久已後吃這廝凋零的無了。（鈔6 2863）  
二哥的那一分家私，早凋零的沒一點兒了。（元3 1136）  
一卧不起，求醫無效，服藥無靈，看看至死，教我沒做擺布。（元3 1136）



直恁般見死不救，莫不是你和他沒些瓜葛沒些憂。(元3 1138唱)

天那，偏是俺養家兒沒福留。(元3 1138唱)

我也沒有三年養育恩，爲甚的沒一個巴親爺認。(元3 1144唱)

「單鞭奪槩」：鈔本に1例古名家本に1例元曲選本に2例見られ1例は各テキスト共に一致する。1例は元曲選本で新たに加えられたものである。

是他新，階頭舊，沒揣的結下冤讎。(元3 1177唱)

「諱范叔」：息機子本に3例元曲選本に6例見られ息機子本の例はすべて元曲選本のものと一致する。あとの3例中2例は、息機子本の中では〈無〉を使って表されており1例は新たに加えられたものである。

着他改日來，我無私宅，這裡也不是他告辭處也。(息7 八)

着他明日來，我沒有私宅的，這裡也不是他告辭處。(元3 1205)

我無私宅，這裡也不是辭處也。(息7 八)

我沒有私宅的麼，這驛亭中豈是你辭別去處。(元3 1205)

賢士，你怎麼說這等沒志氣的話，人生功名富貴皆由自取。(元3 1204)

「金線池」：古名家本に4例元曲選本に7例見られる。古名家本の3例は元曲選本のものと一致するが、1例は元曲選本では削られている。元曲選本の4例中1例は古名家本の中では〈無〉を使って表されており3例は新たに加えられたものである。

明知道你秀才每沒前程。(古1 十一唱)

明知道書生，教門兒負心薄倖，儘教他海角飄零，無來由強風情。

(古1 九唱)

明知道書生，教門兒負心短命，盡教他海角飄零，沒來由強風情。

(元3 1259唱)

若他也是虔婆的見識，沒有嫁我之心，却不我在此亦無指望了。

(元3 1256)

那一個不是我手下教道過的瞎小妮子，料必沒有強似我的。

(元 3 1256)

怎麼門前的地，也沒人掃。(元 3 1256)

〔度柳翠〕：息機子本に 4 例元曲選本に 4 例見られる。息機子本の 3 例は元曲選本のものと一致するが，1 例は元曲選本では削られている。元曲選本の 1 例は息機子本の中では〈無〉を使って表されている。

師父，我們這寺中裡也沒有這十衆僧來(息 7 二)

師父，柳翠這兩日怎生無精神。(息 7 二十一)

師父，柳翠這兩日怎生沒精神的。(元 3 1349)

〔魔合羅〕：古名家本に 3 例元曲選本に 6 例見られ古名家本の例すべてが元曲選本のものと一致する。元曲選本の 3 例中 1 例は古名家本の中では〈無〉を使って表されている。2 例は新たに加えられたものである。

我這里空一望滿眼無歸路，黑暗暗雲迷四野，百茫茫水滄長途。

(古 9 三唱)

好教我滿眼兒沒處尋歸路，黑暗暗雲迷四野，百茫茫水滄長途。

(元 4 1369唱)

你對誰行大叫高呼，公然的沒些惧怕。(元 4 1381)

誰想回家救不得，老漢擔里無過魔合羅，並沒一點砒霜一寸鐵。

(元 4 1385)

〔竹塢聽琴〕：古名家本には 1 例も見られないが，元曲選本には 5 例見られその 5 例中 1 例は古名家本の中で〈無〉を使って表現されているものであり他の 4 例は新たに加えられたものである。

全無那半點兒着實的話，他不肯修身正己。(古 11 十二唱)

全沒些半點兒真實的話，只待要說古談今。(元 4 1449唱)

近來沒有主持，止有一個小道姑看手。(元 4 1442)

雖然贏得官猶在，爭奈夫人沒處尋。(元 4 1443)

難道是古來的思凡仙女，就也沒有。(元 4 1448)

我若不害心疼，等我來打落他一個沒面纔好。(元 4 1453)

「竇娥冤」：古名家本に3例元曲選本に15例見られ古名家本の用例はすべて元曲選本のもものと一致する。あとの12例は新たに加えられたものである。

我數次索取，那竇秀才只說貧難，沒得還我。(元 4 1499)

你再尋思咱，俺家裏又不是沒有飯吃，沒有衣穿。(元 4 1502)

道我婆媳婦又沒老公，他爺兒兩個又沒老婆，正是天緣天對。

(元 4 1502)

我想這婦人每休信那男兒口，婆婆也怕沒的真心兒自守。(元 4 1503)

兀的不是俺沒丈夫的父女下場頭。(元 4 1503唱)

難道你娘家也沒的。(元 4 1509)

這都是我做竇娥的沒時沒運，不明不闍，負屈銜冤。(元 4 1510唱)

若沒些兒靈聖與世人傳，也不見得湛湛青天。(元 4 1510唱)

沒來由填做我犯由牌，到今日官去衙門在。(元 4 1516唱)

「羅李郎」：古名家本に5例元曲選本に8例見られ古名家本の5例はすべて元曲選本のもものと一致する。元曲選本の3例中2例は古名家本では〈無〉を使って表されており1例は新たに加えられたものである。

我一片幹家心話不相投，無來由枉把他收留。(古 5 七唱)

我一片幹家心話不相投，無來由枉把你收留。(元 4 1571唱)

您孩兒忿那一口氣，出的城門，衣服盤纏都無有。(古 5 十八)

您孩兒忿那一口氣，出的城門，衣服盤纏，一些沒有。(元 4 1579)

雖然博得官兒做，爭奈家鄉沒信音。(元 4 1576)

「看錢奴」：息機子本に6例元曲選本に13例見られる。息機子本の中の3例は元曲選本のもものと一致するが、3例は見られない。息機子本のその3例中1例は葉数のところに〈又二十四〉とあり鈔本のもものがそこ

に継ぎ足された格好になっている。いずれにせよこの例は元曲選本では削られている。元曲選本のあとの10例中3例は息機子本の中で〈無〉を使って表されているものであり7例は新たに加えられたものである。

是是是，小人我沒見識了。(息6 十四)

沒些个夫子溫良恭儉讓。(息6 又二十四唱)

你若告他呵，他將這金銀去府上下打點過也沒事。(息6 三十)

空生帶眼安眉漢，則是手中無有錢。(息6 二)

一般帶眼安眉漢，何事手中偏沒錢。(元4 1585)

兵定鼻凹，並無些和氣謙洽。(元4 1587唱)

進定鼻凹，沒半點和氣謙洽。(元4 1587唱)

他家兒女並無一箇兒。(息6 十二)

他家兒女並沒一箇兒哩。(元 1592)

這人沒錢時無些話，纔的有便說夸。(元 1587)

他道我貪他香餌終吞釣，我則道留下青山怕沒柴。(元4 1596唱)

你道是沒錢的好受虧，有錢的好使強。(元4 1601唱)

不是自家沒主顧，爭奈酒酸長似醋。(元4 1603)

空掌着精金嚮鈔百萬資，偏沒個寸男尺女爲繼嗣。(元4 1604唱)

他也沒事，兩樁兒隨你自揀去。(元4 1605)

小子沒記性，這遠年的帳都忘了也。(元4 1606)

「還牢末」：鈔本に5例古名家本に5例元曲選本に9例見られる。鈔本と古名家本の例はすべて一致するが、この5例の内1例は元曲選本では削られている。鈔本や古名家本にない元曲選本の5例の内1例は鈔本と古名家本両テキストの中で〈無〉を使って表されているものであり、4例が新たに加えられたものとなっている。

誰想拳頭上沒眼拔刀相助，打死了平人。(鈔7 3465 古13 五)

我如今知他是死也活也，僧住賽娘兒呵，知他是有也無也。

(鈔7 3484唱)

我如今知他是死也活也，僧住賽娘兒呵，知他是有也无也。

(古13 十六唱)

我如今知他是死也活也，僧住賽娘兒呵，知他是有也沒也。

(元4 1616唱)

偏我要錢不要清。縱有清名沒錢使。(元4 1608)

若是蕭娥沒老公，今夜衙裏宿。(元4 1615)

苦也囉，你沒了親娘，偏留着二娘，把你來打的個不成模樣。

(元4 1619唱)

你也曾共府同堂，豈沒半點情腸。(元4 1620唱)

〔任風子〕：鈔本に3例元曲選本に1例見られ鈔本の1例は元曲選本のもの  
と一致する。鈔本の2例中1例は元曲選本の中では〈没〉ではなく  
〈休〉を使って表されており1例は元曲選本では削られている。

我道便沒怕怖，我可又不慌瘍。(鈔5 十唱)

你可也休怕恐怖，我心中不恍惚。(元4 1673唱)

還沒人員把老本都折了。(鈔5 千七)

〔生金閣〕：息機子本に25例元曲選本に33例見られ息機子本の18例は元曲選本  
のものと一致する。息機子本の18例を除く7例が元曲選本では削ら  
れている。元曲選本の中の息機子本と一致しない15例中1例は息機  
子本の中では〈無〉を使って表されており14例が新たに加えられた  
ものとなっている。

沒娘梳大血疔瘡。(息8 十二唱)

別人不見惟老夫便見我這馬頭前一箇沒頭鬼。(息8 十九)

着我三更前後將着牒文勾那沒頭鬼去。(息8 二十一)

領着包待制大人言語勾沒頭鬼去。(息8 二十一)

我喚他一聲沒頭鬼哥哥。(息8 二十一)

沒頭鬼哥哥。(息8 二十三)

老子也怎麼請他。他是箇不好惹的沒縫兒犯蛆的人。(息8 二十五)

聽的您孩兒到去，都逃竄的一箇也無了。(息8 十九)

聽的說您孩兒到，都逃竄的一箇也沒了。(元4 1730)

只因我家祖代不曾做官，恐沒的這福分。(元4 1716)

大嫂說的是，只此外沒有村店，且到前途去再看來。(元4 1718)

你不知道我那庫裏的好玩器，有……沒價夜明珠……明丟丟水晶盤。

(元4 1726)

走走走，如今那沒頭鬼不來了。(元4 1726)

我說你要打我，可是我沒有手的，我也少不得還你一舉。(元4 1728)

我問你老人家，你却纔說有什麼沒頭鬼。(元4 1729)

我馬前頭這個鬼魂，想就是老人們所說沒頭的鬼了。(元4 1729)

爺，這個正叫做沒頭公事。(元4 1731)

敢這沒頭鬼預先在那裏等我。(元4 1731)

好怕人，當真是沒頭鬼。(元4 1731)

你這沒頭鬼，包待制勾你哩。(元4 1731)

晦氣，這沒頭鬼在門外叫聲應聲。(元4 1732)

沒頭鬼，你說。(元4 1732)

這個沒頭鬼被門神尉當住。(元4 1733)

各テキストの異なる用例を取り出してみただけでも内府本系諸本に手が相当加えられて元曲選が生まれたことがわかる。36作品中24作品において元曲選本で新たに〈没〉の用例が加えられており、その数は〈無〉が〈没〉で表されているものを除いても84個にもなる。こうした〈没〉の増加や元曲選本で、多少削られることはあってもほぼ内府本系諸本中の〈没〉の用例が残されている事、さらには内府本系諸本の〈無〉が元曲選本の中で〈没〉を使って表されることはあってもその逆はない事などは明代後期の口語における〈没〉の優勢さを強く物語っているものといえる。

特に〈没〉の増加が顕著な作品は「燕青博魚」「冤家債主」「竇娥冤」「看錢奴」「生金閣」等であるが、これらの作品に共通している点はそれぞれの作品の登場人物にある。これらの作品に出てくる登場人物はほとんどが市井

の庶民なのである。例えば「燕青博魚」では梁山泊の盗賊が主人公であるし、「冤家債主」は主に兄弟の財産分与の話が展開する商人の家庭の話となっている。また「竇娥冤」では〈没〉の出てくる台詞を言っているのは娘役の竇娥や母親そして首切り役人であるし、「看錢奴」は質屋を営む守錢奴の賈仁が困窮している周から子供を買うことから始まる話、「生金閣」は農家の息子郭成が官吏の職を得るために妻と一緒に都へ行こうとする途中で病にかかり悪人役の龐衙内が郭成の妻を無理矢理に自分の妻にしようとするが最後は包拯に裁かれるというものである。どの作品も多く登場するのは盗賊、無能で卑劣な官吏、商人、貧困者、農民、娘、母親といった当時あまり教養を必要としない市井の庶民なのである。逆に「單鞭奪槊」のような作品には身分の高いヒロイックな武将達が登場しており、その武将どうしの話す言葉は当然市井の庶民のものではなく文語色の強いものとなっている。他の「麗春堂」や「漢宮秋」、「任風子」等の作品も同じ理由で〈没〉が見られなかったり〈没〉の数が少ない作品になっているものと考えられる。

### Ⅲ 〈無〉を〈没〉の表現に書き換えた用例

今回調査した36作品中14作品に内府本系諸本の〈無〉を元曲選本で〈没〉に替えた表現が見られ、その数は22箇所であった。下の表2はその〈没〉に置き換えられた箇所及びそれを話す役柄についてまとめたものである。

下記の役柄を見ると〈無〉から〈没〉に変えられた台詞を話す者はいくつか特殊な場合を除き大方読者に教養ある人とは感じさせない市井の庶民となっている。特殊な場合としては「諱范叔」、「還牢末」などがあるが、例えば「諱范叔」の驍術は齊国の中大夫ではあるけれども台詞を言っている時は腹をたてており、しかも相手は配下の下級役人であるし、「還牢末」の李榮祖の台詞ははめられて入った獄中での台詞なのである。つまり身分の高い教養をそなえていて当然の者であっても憤慨した気持ちを表す場合や話す相手が下の身分である場合彼らの言葉には〈没〉が使われているのである。恐らくそのほうが読者にとってはより自然でリアルに感じる台詞であるに違いない。「看錢奴」の増神福や「勘頭巾」の張鼎も自分よりも地位の低い者に対しての台詞であるから〈没〉が使われていることも自然なことなのである。

表 2

作 品	内府系諸本	元曲選本	役 柄
「燕青搏魚」	都無 無刃器	→ 一些沒有 → 也沒的力	: 店小二 旅館のボーイ : 燕青 梁山泊の盜賊
「牆頭馬上」	眼里無珠	→ 眼中沒的珍珠処	: 李千金 李世傑の娘
「蝴蝶夢」	無有錢鈔 無是処	→ 沒有錢鈔 → 沒是処	: 王大 莊農で王家の長男 : 王大の母
「勘頭巾」	並無有 無那半点儿心慈	→ 委實沒有 → 全沒那半点儿慈	: 王小二 貧者 : 張鼎六案都孔目
「黃梁夢」	無穿的	→ 沒穿的	: 魏舍 父が尚書で無賴者
「冤家債主」	無極所奈 無了	→ 沒奈何 → 沒一杭点了	: 福僧 放蕩な次男 : 張善友 商人
「諱范叔」	無私宅 無私宅	→ 沒有私宅 → 沒有私宅	: 騶衍 齊国中大夫 : 騶衍 齊国中大夫
「金錢池」	無來由	→ 沒來由	: 杜棗娘 妓女
「度柳翠」	無精神	→ 沒精神	: 妓女
「魔合羅」	無歸路	→ 沒処尋歸路	: 李德昌 商人
「羅李郎」	無來由 都無有	→ 沒來由 → 一些沒有	: 商人 : 湯哥兒 孟倉士の子
「看錢奴」	並無些和氣謙洽 並無一箇兒 無有錢	→ 沒半点和氣謙合 → 並沒一個兒 → 偏沒錢	: 增福神 : 店小二 店のボーイ : 佃仁 貧者
「還牢末」	是有也無也	→ 是有也沒也	: 李榮祖 獄中
「生金閣」	一箇也無了	→ 一個也沒了	: 婁青 下級役人

## IV まとめ

36作品における〈没〉について内府本系諸本と元曲選本とを比較した結果、明の前期と後期では〈没〉と〈無〉の使用状況が異なることが明白となった。まず第一に元曲選本での〈没〉の増加が顕著であることから明初に比べ明後期では口語での〈没〉の使用頻度が〈無〉よりも非常に高かったことがうかがえる。第二には元曲選本において〈没〉の増加が際立っている作品の場合盜賊、商人、農民、貧民、妓女、娘等あまり高い教養を必要としない市井の庶民が登場することが多く、更には内府本系諸本の〈無〉が元曲選本において〈没〉となっている台詞の登場人物も同じく盜賊、商人、妓女等が多いこ



とから、明後期には市井の庶民のような一般大衆の口語の世界ではほとんど〈没〉が〈無〉に取って代わっていたと考えられる。

最近発見された「旧本老乞大」(以後「旧本」と略称)には〈無〉が29例見られるが、奎章閣叢書第9の「老乞大」(以後奎章閣と略称)においては〈無〉の例はわずか5例のみとなっている<sup>⑥</sup>。下記の表3に示す通り「旧本老乞大」の中のほとんどの〈無〉が奎章閣では〈没〉に書き換えられているのである。〈没有〉も奎章閣には4例見られるが元本のほうには1例も見られない。

尚、表3の( )の中の数字は各テキストの頁数を示したものである。

「旧本」が元代の漢語を反映しているものであるのに対し、奎章閣は1480年-1483年頃の改訂版かもしくはそれに近いものとされていることからみて1480年頃の漢語が反映されたものであると考えられる<sup>⑦</sup>。こうした「老乞大」の資料における〈無〉から〈没〉への書き換えをみれば明代中期頃には初級

表3

「舊本」	奎章閣
無人家 (6)	沒人家 (17)
席子無 (14)	席子沒 (45)
無甚麼錢本 (15)	沒甚麼錢本 (48)
無甚忙勾當 (17)	沒甚麼忙勾當 (54)
無井那怎麼 (20)	沒井阿怎麼 (64)
無甚店子 (22) (22)	沒甚麼店子 (70) (71)
怕無時 (23)	怕沒時 (73)
別箇菜都無 (23)	別箇菜都沒 (73)
無處安下 (26)	沒處安下 (83)
無糶的米 (30)	沒糶的米 (96)
無甚明火 (31)	沒甚麼火 (101)
無甚備細 (41)	沒甚麼備細 (134)
無人 (43)	沒人 (140)
無來由 (45)	沒來由 (146)
裏頭無一張兒歹的 (47)	裏頭沒有一錠兒低的 (153)
外無懸缺 (48)	外沒缺少 (157)
別無甚買賣 (50)	別沒甚買賣 (165)
無阿做甚麼買賣 (55)	沒時做甚麼買賣裏 (182)
無盤纏 (63)	沒盤纏 (211)

レベル程度の会話においてすでに〈無〉から〈没〉へと移行していた可能性は十分にある<sup>⑧</sup>。

「老乞大」の上記状況及び内府本系諸本と元曲選本の比較結果からみて〈没〉と〈無〉について次のような事が言えるのではないだろうか。即ち、明前期頃においては一般大衆の口語には〈無〉も〈没〉も共に否定詞として使用されており、〈無〉は口語と文語双方に用いられる中間的な存在であったが、明の北京遷都後100年も経った頃から口語での〈没〉の優勢がより顕著となり、その結果〈無〉は文語色をより強めることとなり、元曲選本の成立時には一般大衆の口語では〈没〉を使うことが自然で〈無〉は文語を意識した時に使用されていたのではないだろうか。具体的に言えば明前期では店のボーイが〈並無一箇兒〉と言っても自然であったが、明後期にはこれが不自然に感じられるようになり臧晋叔によって〈並没一個兒〉と書き換えられたということである。

#### 注

- ① 太田辰夫「中国語歴史文法」(江南書院 1985年) 302頁
- ② 香坂順一「白話語彙の研究」(光生館 1983年) 203頁
- ③ 「元曲選」(中華書局 1984年)を使用し、于小穀本、脈望館鈔本、古名家本、息機子本については「全元雜劇初編一」(世界書局 1968年)に収められているものを使用した。
- ④ 小松謙「内府本系諸本考」(汲古書院 1991年「田中謙二博士頌壽記念 中国古典戲曲論集」所収) 156頁 126頁 127頁
- ⑤ 石鏡智 李讷「十五世紀前后的句法变化与现代汉语否定标记系统的形成 否定标记“没(有)”产生的句法背景及其语法化过程」(2000年第2期「语言研究」) 50頁
- ⑥ 「日本老乞大」(慶北大学校2000年 古典叢書9「元代漢語本《老乞大》」所収) 奎章閣叢書第9「老乞大」(聯將出版事業公司 1961年「老乞大諺解・朴通事諺解」所収)
- ⑦ 太田辰夫「中国歴代口語文」(朋友書店 1989年) 62頁
- ⑧ 「中国語学新辞典」(光生館 1969年) 296頁  
玄幸子「新発見『老乞大』について」(大修館書店 1999年 12「しにか」所載) 97頁

(大谷大学助教授)